

第28期社会教育委員の会議第6回

公開ワークショップ

「みんなで語ろう！子どもの貧困と

関係の豊かさ」議事録

平成31年2月24日

【１】 開催日時

平成３１年２月２４日（日）１３時３０分～１６時３０分

【２】 開催場所

世田谷区役所第３庁舎３階 ブライトホール

【３】 出席委員

萩原委員（議長）、坂倉委員（副議長）、峯岸委員、神保委員
森岡委員、村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員

【４】 出席職員

教育委員会事務局

花房生涯学習部長、田村生涯学習・地域学校連携課長

大井社会教育係課長補佐、御園生社会教育担当係長、橋本社会教育係主任

【５】 公募参加者

４４人

【６】 次第

１ 開会 挨拶 世田谷区教育委員会事務局生涯学習部長 花房千里

２ 第１部 基調報告

社会教育委員の会議の取組みからの問題提起

「子どもの貧困をめぐる課題－『関係性の貧困』を中心に」

報告者：第２８期社会教育委員の会議議長 萩原建次郎

３ 第２部 リレートーク

地域共生のいえ「岡さんのいえＴＯＭＯ」代表 小池良実氏

せたがやこども食堂・みっと代表 村上由美氏

４ 第３部 ワークショップ

インフォーマルな「共」のつながりを豊かにするために

－ 交流とネットワークづくり －

○司会 定刻となりましたので、ただいまから社会教育委員の会議「みんなで語ろう！子どもの貧困と関係の豊かさ」を開会いたします。

開会に先立ちまして、世田谷区教育委員会事務局生涯学習部長の花房より御挨拶申し上げます。

○生涯学習部長 本日は、御多用のところ、また休日にもかかわらず御参加いただきまして、本当にありがとうございます。また、日ごろより世田谷区のエ育行政に深い御理解と御支援を賜りまして、心から御礼申し上げます。

さて、社会教育委員、御存じの方もいらっしゃると思いますが、社会教育委員の会議について最初に触れさせていただきます。

世田谷区では、教育委員会の諮問機関として昭和39年に設置をいたしまして、主に青少年教育をテーマに調査研究をしていただいております。現在は第28期としまして、駒澤大学の萩原先生を初めとする10名の委員の方に活動をしていただいております。今期に至りましては、この後、第1部の基調報告で、議長の萩原先生より詳細をお話しされると思いますので、簡単に御説明をいたします。

お手元の資料の資料2をごらんください。A3判の資料になってございます。前期の第27期ですけれども、こちらが子どもの貧困をめぐって、「関係性の貧困」に焦点を当て調査研究を重ねていただいた結果、右下の方になりますが、どんな状況にあっても生きづらさを感じず前向きに生きていくための環境のあり方の整備が重要であるという方向性と、一番下でございます3つの方策が必要であると結論づけていただきました。

そこで、今期はこの方向性と3つの方策をさらに進めていただきまして、エ育行政や、さらに子どもの施策などにもつなげていただけるように諮問をさせていただいたところでございます。そして、委員の皆様にはそれを受けて議論を重ねる中で、エ育行政の施策に反映するためには、もっと広く区民の皆様の声を伺って、それを今期の会議に反映させることが重要ではないかということで、今回、このようなワークショップを開催させていただく運びとなりました。この場をおかりしまして、改めて社会教育委員の皆様へ御礼申し上げます。ありがとうございます。

結びになりますが、本日のワークショップを通じまして理解を深めていただき、御参加された皆様が発信者となっていただき、子どもの貧困について地域課題の発見や課題に向けた取り組みが地域に広がっていく機会になれば幸いです。

簡単ではございますが、教育委員会を代表いたしまして御挨拶といたします。

○司会 花房生涯学習部長、ありがとうございました。

申しおくれましたが、私は第2部まで司会を担当いたします、社会教育委員の山崎でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、第1部に入ります。

第1部は、基調報告としまして、本日の趣旨や、また社会教育委員の会議の取り組みからの問題提起を、当会議の議長であります萩原建次郎より御報告いたします。

○議長 皆さん、こんにちは。社会教育委員の会議の議長をしております、駒澤大学の萩原と申します。

子どもの貧困をめぐる問題、課題について、我々は議論を重ねてきました。その中で特に現代の子どもの貧困の核心となる部分は、経済的な貧困というよりも「関係性の貧困」ではないかということを私たちは思い立ちました。この「関係性の貧困」とは何だろうかということ、これはいろいろとイメージしづらい部分があるかと思いますので、私のほうからは、まず現代的な子どもの貧困というのが一般的にどう捉えられているのか、最初の10分ぐらいで説明させていただきます。その後、この委員会で2年間、さまざまなお立場の委員の皆様から出た意見、あるいは世田谷区の児童館に長くお勤めだった職員の方へのヒアリング等々、いろんな事例を交えてお話ししたいと思います。そして後半のグループワークにもつながっていきますが、私たち社会教育委員の会議で提言した3つの方策についての説明をさせていただきたいと思います。

まず、この絵を見ていただきたいのですが、これは4人家族の絵です。描いたのはお子さんですが、お父さん、お母さん、お兄さん、僕という4人家族のある日の夕食の時間の絵です。テレビを見ていて、食卓には3人の人間が座っています。

ここで皆さんに伺いたいのですが、テレビを見ているのは誰でしょうという問題でございます。4択ですね。お父さん、お母さん、お兄さん、僕でいきたいと思いますが、お父さんだと思われる方、手を挙げていただいてもよろしいですか。もしかしたら、缶ビール片手に飲んでいるという光景は日常的にあるかもしれません。では、お母さんだというふうに感じる方はどのぐらいいらっしゃいますか、お1人。では、お兄さんじゃないかと感じられる方、お2人。では、僕じゃないかなと、圧倒的に僕ですね。

答えは、お母さんです。お父さんは、お兄さんに今日学校で何があったのか、どんなことをしてきたのかという話をお兄さんに振り向けている。お母さんはテレビに夢中、僕はひとりぼっちという、そういう解説がついた絵です。

つまり、「関係性の貧困」って、外側から見ていると、ごく普通の家族の食卓の一風景に見えますが、僕にとって孤独な場所になっているわけです。お父さんはお兄さんにばかり関心が寄っている。お母さんはテレビばかり見ている。僕だけひとりぼっち。よく孤立ということを言われますけれども、これは非常に見えにくいわけです。

では、現代の貧困をどう捉えるか、お話ししたいと思います。これは一般的にどう捉えられているのかということの解説になります。

貧困とは、恐らく世代によって貧困の捉え方はまちまちになってくると思います。戦後の焼け野原の大変な時期を過ごされた方にとっては、貧困というのは経済的な貧困というふうに捉えられるかと思いますが、実は貧困とはもう少し広く捉えられるものです。これは社会福祉の辞典から引っ張ってきたものですが、貧困というのは、「生活する上であってはならない欠乏状態」のこととなっています。貧困という言葉の意味を捉えると、経済の貧困はもちろんですが、体験の貧困もはいつてくる。非常に生活が豊かになる一方で、生活体験の質が変わっていく。今は鉛筆を削れない子もふえてきているし、雑巾も絞れないとか、生活をする上であってはならない欠乏状態、その体験がどんどん貧困になっているとも言われたりします。

あと、想像力の貧困という形で貧困という言葉を使うことも可能かと思います。例えば、こんなことをしたら怪我をしてしまうだろう、こういうことをしたら人は傷つくかもしれないという想像力も含めると、この貧困という言葉は、もう少し経済的な意味の貧困だけではないということを御理解いただけるのではないかと思います。

次に、貧困観というのは今大きく2つに分類できると言われています。

1つは古典的な貧困です。これは戦後復興期の経済的な貧困のことを指すわけです。これはもう本当に絶対的な貧困、着るものも、食べるものも、住むところもままならないというような意味での貧困なわけで、それで今の現代の子どもたちの貧困ということを捉えてしまうと、全く当てはまらないと感じていらっしゃる方もいるかと思います。ただ、このときの絶対的な貧困の状況の中にあっても、関係性においては、果たして貧困だったかということですね。一緒になって汗水流して働いて、よくなろうという意味での共同意識だとか関係性というのは、戦後の復興期というのはあったのではないかと思います。

では、現代的な貧困と言われるものは何か。これはバブル経済が崩壊以降、それが顕在化されたというふうに言われています。それは「関係性の貧困」というものが広範に広がった上に、経済的な貧困が押し掛かるという状況です。ですから、バブル経済のころには、

「関係性の貧困」というのは、便利な私たちの現代生活の中では当然起こってきたことかもしれません。

先ほどの絵は、あれは1970年代、お気づきになった方もいらっしゃるかもしれませんがけれども、テレビが古い。70年代に描かれた絵です。つまり、日本が高度経済成長期に入って生活がだんだん豊かになっていく中で、家庭の中にメディアが入り込み、今は1人に1台スマートフォンやタブレットで動画が見られるような状況にあるわけで、それぞれの家族みんなで食卓を囲むということも、場合によってはままならないわけです。そういう意味では、高度経済成長とともにこの「関係性の貧困」というのは徐々に徐々に浸透してきたのかもしれません。そこにプラス、バブル経済が崩壊したことによって、一気に相対的貧困というものが顕在化したというような捉えかたがされています。

では、現代の子どもの貧困の特徴として、何がそれによってもたらされるのかということです。つまり、「関係性の貧困」に経済的な貧困が重なることによって言われているのが、遊ぶ機会や体験する機会、学習の機会、友達や家族などとのコミュニケーションの機会、そして進路選択の自由や将来展望、希望の剥奪ということが言われています。家族とのコミュニケーション機会もままならず、休日にでも気晴らしに家族でどこかへ行こうかといっても、今はどこへ行くにもお金がかかる。経済的な貧困がそこにプラスされていくと、そういうことができなくなっていくわけです。高校進学、大学進学、当然そういう進路選択においても制限がかかってくる。そうすると、子どものころから自分の生きる選択肢が制限されていくということが見え隠れしていくわけです。

そのことによって、友人関係、そしてまた親御さんも地域社会から孤立する、さまざまところでコミュニケーションの断絶が生まれやすくなる。そして、当然そこには自尊心、自己肯定感、自分自身が何か挫折しても、そこから這い上がっていく自己回復力、学ぼうとする意欲、何かあったときにSOSを自分で出す意欲が剥奪されると言われています。貧困の連鎖で、悪循環になっていく。そうした基本的な意欲の部分がだんだんと剥奪されてしまえば、当然またさらに生活上の選択の可能性が制限されていく。こういうマイナスの循環だということが指摘されています。

では、現代のこうした特徴を持つてはいるものの、この貧困に対して、その原因や対応については大きく二つの論調があるとされています。

1つは、個人主義的な貧困観というものに基づくものと、社会構造的貧困観との2つに分けられると言われています。

個人主義的な貧困観とは、貧困というのは個人の問題で、それを社会の政策としてそんなに分厚くサポートする必要はないであろうという物の見方です。そういう立場からすると、貧困の要因というのは、子ども自身や親の努力不足、自己責任だと。俺たちだって昔は大変な思いをしてきた。今は豊かじゃないか。だから、それは努力不足だ。その家族、それを育てた親の責任じゃないかというような物の見方です。

いや、これは社会の大きな変化、私たちのライフスタイルそのものも大きく変わったことによって貧困がもたらされているという見方も当然ある。そちらは社会構造のさまざまな問題によってもたらされているというふうに見るわけです。個人に還元はしない。だから、一見すると家庭の中に貧困という現象が起こるけれども、親御さんもそういうところで人とコミュニケーションを断ち切ってしまう。その中で子どもがまた不利益をこうむってしまう。一見、それは親の責任に見えがちなものですが、その親もなぜそうなるのか、どうしてそういう家庭が孤立するのか、そういったことにまで立ち入ってみると、それは実は社会の大きな問題構造があるのではないかということです。

1つは、非正規雇用率がどんどん拡大していることです。戦後の復興期から高度経済成長、バブルのころまでは終身雇用制で来たわけですが、その後は非正規雇用率が拡大していて、今は4割近い状況にあるわけです。つまり、努力しても既にパイが決まっている、正規雇用の器の量が決まってしまっている。大きさが決まってしまっているので、その人に能力がある、ないにかかわらず、不安定雇用な状況が生まれているということ、これは国の政策の誘導としてそういうふうになってきた背景があります。ですので、そのお子さんの親御さんも、そうした非正規雇用の中にいる可能性が当然ある。これは若い人たちだけではなく、親の不安定収入ということも当然あるわけです。だから、就労はできても不安定雇用状態での生活がある。

もう1つ、住宅供給の制度的な不備と高コストの住環境で、これも日本の高度経済成長期にできた慣習として、土地と一軒家、あるいはマンションを買って、長く高いローンを払い続けるというこの慣習がいまだ崩れないわけです。そういう中で、当然世田谷区は高い家賃や固定資産税、高額な住宅ローンというものを抱え、若い世代であっても当然抱えながら生活せざるを得ないという状況がある。

そして、私たちも日本の隅々まで消費主義のサービス社会に移行したということ。暮らしのあらゆる営みにお金がかかる社会になってきたことです。例えば医療、保育、教育、介護、放課後や休日の遊び、余暇活動まで、どこかへ遊びに行くにしたって、休むにした

って、何をするにしてもお金がかかる、そういう社会に変わってきた。

そして、上の3つは、非常に経済にかかわる問題です。だから、経済的な貧困に大きく影響が出る問題ですが、これから御説明する2つについては、「関係性の貧困」に主に大きく影響が出てくる問題です。これは個人情報への過剰な保護です。近隣関係機関、団体同士のつながり機会が大幅に縮小。個人情報保護法ができてきて以来、それがいろんなところで起こってきているわけです。クラス名簿もつくることがままならないような状況も起こっているわけです。自治会でも名簿も余り載せられない。場合によっては、電話番号も載せないということも、地域によって起こっている。そういった意味では、つながろうにもつながりにくい。そして地縁ネットワークが非常に衰弱してきている、身近な地域での顔の見えるつながり機会が大幅に縮小している。

先ほども控え室で事務局と打ち合わせをしていたのですが、その席でも世田谷での町会の加盟率というのは5割ちょっとという話がありました。まず地域とかかわる1つの入り口とチャンネルでもある町会というのも大きく変わってきているわけです。

これはあくまで一般的な話で御説明をさせていただきました。果たして世田谷区はどうか。世田谷区の子どもたちや、親御さんたちや、地域や学校というのはどんな状況にあるのか。そのことを2年間、私たち社会教育委員が、小中の先生もいらっしゃいますし、青少年委員の方、民生委員、保護司の方、あるいはPTAの方、また地域で子どもの遊び場である子ども食堂であるとか、普段から地域でかかわっていらっしゃる方にも委員になっていただいているので、それぞれのお立場から気になることをとにかくどんどん出してもらいました。それをこれから皆さんに御紹介したいと思います。

先ほど冒頭にござんいただいたように、「関係性の貧困」というのは、とにかくデータにしにくい。ですので、とにかく事例をとことん集めるやり方でやりました。

まず、子どもたちで気になること。今の子どもの遊びはカードゲームなど、お金がかかる遊びがコミュニケーションツールになっている。遊ぶこと自体をしていない、心配な子どもも見え隠れしているが、そういった子どもが何をしているか見えない。家庭の事情はわからないが、靴下がすごく汚れている男子生徒が、そのことで女子からの敬遠や、いじめに発展したケースがあった。最近感じるのは、子どもたちに夢がない。諦めてしまうのかわからないが、貧困層だけではなく、全体に夢ややりたいことを語る子どもが少なくなっている。これは冒頭説明させていただいた夢や希望の剥奪ということ、そのことともしかしたらどこかでつながっているのかもしれない。

では、世田谷区の親御さん、お子さんを持つ親御さんを見ていてどう気になることがあるか。最近子ども会の活動もない地域が多く、親同士のつながりも少ない。地域やPTAの活動に出てこない、出てこれない人が問題を抱えていることが多い。親の問題も一緒に考えていかないと解決はしない。未就学児のころから問題は生じている。現代の核家族化に伴い、お父さんは仕事で帰りが遅く、お母さんは相談したくても、自分の親がそばにいないのでできないというところから問題は生じているように感じる。

育児に疲れた母親が休みをとれるような活動をしている人がいる。子どもを連れて参加し、子どもを少し見ていてあげることで母親を助ける活動を行っている。出産からの継続した支援を行わないと親の状況が見えないし、その後の子どもの状況も見えず、切れ目のない支援が必要だという声が上がりました。

では、学校はどうでしょうか。小学校では実際に給食が生きるツールになっている子どももいる。周りの子どももその子どもの状況がわかっているので許容している。一見すると、世田谷区はとても経済的には豊かと感じるかと思いますが、実際は生きるツールになっている子どもも存在するという指摘もあります。

中学校では貧困が表面化するのは3年生であり、進路の結果、私立高校に進学ができず、そこでわかることがある。就学援助を受けている生徒について調べてみたが、そこまで必要ないように見える子どもが受けていたり、必要そうな子どもが受けていなかったりと、見た目からはわからない。親に勧めても就学援助を断る場合もある。その結果、子どもに不利益が生じていることもある。つまり、制度的には就学援助というのが補助金としては出ていますが、それがあから貧困がないというわけではないことがわかります。

今、小学校で抱えている問題を掘り下げると、親が精神的な疾患を抱えていることが多い。指導しても変わらないし、子ども家庭支援センターや民生委員が間に入っても一時的な効果で、結果的に警察から一時保護をかけてもらい、生活改善や親子関係の修復を図らなければならないといった現実がある。これについては、世田谷区の事例ではありませんが、他区の児童養護施設の園長先生から伺ったところだと、児童養護施設にお子さんを入れざるを得ない親、その親の精神疾患率が6割ということをおっしゃっていました。特に母子家庭において相対的貧困率は5割です。非常に高い率で相対的貧困に陥っていきます。

それをもう少し具体的に見ていくと、例えば女性が1人でその家庭を、世帯を支えるためには、昼間の仕事ではなかなか見つけられず、夜の仕事に行くことが多い。夜の仕事だと、結局、お客さんの相手をせざるを得ない。常連のお客さんをつかむために深酒をする、

朝まで飲むというようなことが繰り返される中で、朝起きられず、子どもを起こさなければいけないけれども、それができないということが繰り返されていく中で、場合によっては子どもに手を上げてしまう。そして本人自身もしんどい思いをしながら精神的に参ってしまう。それで通報されて、やむを得ず、子どもと別れなければいけない。本人自身の精神もやられていく、体もむしばまれていくというような事例もございます。学校がどの程度掴んでいるのかわからないが、わかっても手だてがない現状がある。何とかしたくても手が届かないのが現状だということです。

では、世田谷区の地域から見てどうだろう。子どもの貧困以前に、地域の中で孤立しているために、アプローチが必要な人がいることも課題として認識されている。子どもたちが相談する場として、児童館に来ている子どもには児童館の職員がいるが、来ていない子どもにはそういった場や人がいない。学校を離れると支援の場がなくなるので、地域が小さい頃からコミュニケーションをとりながら相談に乗ってくれる駆け込み寺のようなものが必要だと感じている。補習に関して意欲があり、問題のない子どもは出てきているが、本当に必要な子どもが出てこられる場をつくることが重要だと思う。ある児童館では先行して「じどうかん食堂」を実施している。地域を巻き込み、達成感も得られているが、本当に必要な子どもが参加しているかはわからないのが実情。参加している人は喜んでいて、仕事の転勤で子育て世代が転入してきた際、区の施設もよくわからないため、子ども食堂は1つのよいきっかけになったとも聞いたということです。地域でのそういったボランティア活動が最初のセーフティネットになるというケースもあるようです。

このように見てきたときに、現代的貧困の見えづらさや深刻さというのがわかってくるかと思います。まず、現代の貧困は金銭的なものだけでは見えてこない問題を抱えている。見た目ではわからず、逆に金銭的に裕福に見えなくもない。そういった家庭が他者を避け、むしろ自らを孤立させる傾向もある。

今は子どものSOSが見えない状況がある。そこが見えたとしたら、子どもとのかかわりを通してである。そのためには、学校、地域にそれぞれができることがあり、連携していかなければならない。

子どもは個別の家庭環境で育っているのです、自らの置かれている環境に疑問を持たず、その状況から自発的に脱することは難しい。自分からその状況を打破できるきっかけになるような場があるとよい。お子さんからすると、まだ小さいと当然ですよ、ほかの家庭と比較することがないので、自分の家庭環境が世界の全てになって、それが標準というこ

とになるわけです。ですので、中学生や高校生になってそういうことに気づくということ。その意味では、なかなか本人自身からうちは困っていますとは言えない、わからないということが、この問題の見えづらさにさらに拍車をかけている。

実態として他の子どもと比べて自由がない環境で育つと、意欲が徹底的に阻害されてしまう。それは子どもの責任でもなく、親の責任でもない。そうなったときに、その子どもが本来伸びるはずの人生を社会的に放置してもいいものかという視点に立つと、初めて相対的貧困の深刻さがわかる。

ここまでは委員から出た意見や事例を御紹介しましたが、では、私たちがこの状況の中で、次の解決とまで至らないにせよ、この子どもの貧困問題にどう向き合ったらいいのか、その突破口はあるのかと頭を悩ませていたときに、長く世田谷区内の児童館にお勤めの工藤恵子さんに来ていただいて、40年間の中での事例をお話いただきました。そこから私たちは1つの道筋、手がかりを得ました。幾つかの事例の中で特に印象深かったもので、これが提言につながっていきます。

A君、B君、2人の男の子はともに7人兄弟で、両親も沖縄出身。偶然にも両方の両親が離婚し、家庭崩壊の状況だった。川崎市に住むA君が世田谷区に住むB君を誘い児童館にやってきた。その後、A君は消息不明となったが、B君はずっと児童館職員と地域の方々のお世話になった。B君は4人の兄弟がいなくなり、父の違う2人の妹の面倒を見ることになった。そのために住み込みで働き、妹たちを育てた。B君は現在、中学卒業で非正規雇用のため、生活は苦しいが、自分の夏休みや連休を児童館行事の手伝いに使い、恩返しをしているという事例です。

ここから私たちが学んだことは、1つは、児童館への恩返しはB君の励みとなっていて、職員と地域の方との温かい関係性の中で曲がらず、一生懸命生きていこうという生き方につながっている。経済的には非常に厳しい状況にあるけれども、児童館を中心として、その地域の方々がとてもよくお世話、気にかけてくれた。人間的な温かい触れ合いの中で、彼は頑張って妹たちも育てながら、非正規雇用にありながらも曲がらずに前向きに生きている。そして、この事例からわかるのは、お金ではないところの価値意識で支えられているという意味では、貧困はお金だけではないと改めて感じさせる事例であった。

我々大人たちが知恵を出し合い、工夫で何とかその子たちを特別視するが、周りとの差を感じさせない形で、みんなと温かく見守れる関係をどのようにつくっていくかが大事。つまり、この子は困難を抱えているけれども、その困難を抱えているということを、他の

友達や人間関係の中に、我々大人が下手に介入して、それを見える化してしまうのは、その子にとって逆に不利益になってしまう。だから、特別視しながらも、あえてそれがわからないように配慮する、そういったこともとても大事だということを、工藤さんから教えていただきました。貧困の子どもたちという目的では、ある意味、ラベリングになっていく。だから、ありとあらゆるところに敷居の低い、どんな人でもウエルカムというような場こそが、こういったことに対しては大事なのかもしれません。その際、地域で子どもが育つという中で、地域の力がどういうふうに結集すればいいのかを考えることが大事というサジェスションをいただきました。

私たちはこの問題に向き合うために、子どもが孤立しないためにはどうすればいいんだろうか。そして、子どものＳＯＳをキャッチするにはどうすればいいんだろうか。子どもに伴走する大人をどう確保すればいいんだろうか。既存の制度を有効に活用するにはどうすればいいんだろうか。既に世田谷区では子どもの貧困をめぐる施策はもう30ぐらいはあるけれども、それが広く当事者に届いているかという点、残念ながらまだ届き切らないというところがあるわけです。そういったことも含めて、私たちはこうした問いに向き合わざるを得ないわけです。

そうした中で、先ほどの事例も手がかりにしながら、私たち社会教育委員の会議では3つの方策を何とかまとめてみました。

まず1つは、人々が自由にボランティアに出会い、交流し、楽しみ、育ち合え、自然と助け合える関係が生まれてくる場としてのインフォーマルな「共の世界」を豊かにすること。そして、当事者がつながれるチャンネルをふやし、彼らが自然とつながった身近な「インフォーマルな共の世界」から適切な支援に結びつくためにも、多様な地域資源や社会資源がつながり、豊かな共の世界を育むプラットフォームが必要だということ。そして、インフォーマルな「共の世界」から育まれ、子ども・若者の生きづらさに寄り添える関係が持てる第三の大人のネットワークが必要だということ。この3つが今後のこの貧困問題に向き合うためには大事な視点であり、1つの方策として中長期的に目指すべき方向性ではないかというふうに示しました。

ここでは、余り聞きなれないインフォーマルな「共の世界」、プラットフォーム、第三の大人という言葉がありますので、そこをもう少しみ砕いて御説明します。

まず、インフォーマルな「共の世界」というのは、これは私たちがどう考えているかということですが、人がさりげない日常の中で出会い、交流し、楽しみ、育ち合え、自然と

助け合える関係が生まれてくる場を「共の世界」と定義します。行政的な制度やサービスは公です。公的と言いますが、それに対して、そういう制度的に、あるいはサービス化されたものではなくて、私たちはさりげなく日常の中で、御近所づき合いの中で、あるいは子ども会活動であるとか、そういった地域の人たちのボランタリーな助け合いの生まれてくる場です。これは、例えば地域の居場所とかサロン、あるいは地域の縁側みたいな、そういうふうに言いかえてもいいかと思います。

「関係性の貧困」状態にある当事者が公的支援制度や支援施設につながるには、まず、人と人とが自然につながるチャンネルを身近な日常につくっておくことが必要だろう。公共施設はあっても、とりわけ小さな子どもの生活圏には存在しないことも多い。だからこそ、もっと子どものほうから自然と近寄っていける身近で日常的なかかわりの場をつくることが必要ではないか。

確かに世田谷区は30館近くの児童館が展開されているわけですが、それでも小学生ぐらいの子どもにとっての生活圏、徒歩で行ける距離感、そういったところで考えると、身近にふらっと行ける、あるいはちょっと見知った顔で話ができるような場というのがまだまだ必要ではないか。

これからリレートークとして、地域共生のいえを展開されています岡さんのいえの小池さんや、子ども食堂を展開されています村上さんにもお話しいたしますけれども、そういったところで自然と声かけができるような関係性というのが見えてくるかと思います。この辺のところは、お2人にちょっと話を委ねたいと思いますが、そのような「インフォーマルな共の世界」が豊かに育まれることが必要ではないか。

「共の世界」を育むプラットフォームも必要です。インフォーマルな入り口から、当事者が適切な支援制度やサービスにつながっていくためには、公的施設や機関、市民団体やその活動、民間事業者が互いにつながり合い、いざというときに協力し合える生きた連携が必要になる。それには区内外にどのような社会資源、地域資源があるかを可視化することが求められる。例えば貧困をめぐる当事者が、一見無関係な高齢者福祉、医療保健機関等からつながることもある。また、保健所が若い親の最初の支援機関として入り口となり、親子サークルの情報提供に結びつくこともある。だからこそ、教育機関だけではなく、近接領域の機関や専門職、市民活動団体や場ともつながり、情報を共有する必要がある。このように、当事者がつながれるチャンネルをふやし、彼らが自然とつながった身近な「共の世界」から適切な支援に結びつくためにも、多様な地域資源や社会資源とつながり、豊

かな「共の世界」を育むプラットフォームが必要だろうということです。

最後に、第三の大人についての御説明もさせていただきます。

地域の課題解決に心を寄せるボランティアな人々というふうに定義しました。それは必ずしも公的な役職や専門職としての制度的な責務ではなく、個人の志で動く一般の市民のことを指しています。それは問題行動をなくすための人ではなく、親御さんやお子さんの生きづらさに寄り添える関係性、関係を持てる人というふうに私たちは定義しました。

これは必ずしも新しいことではなくて、かつてあった町工場の経営者や地元で働く職人さん、農家の方といった人々がこうした第三の大人になってネットワークをつくり、さりげない見守り役として地域のつなぎ役となっていたらというところ。それが高齢化や都市化、宅地化の中で大きく変わってしまったということです。この古くて新しい第三の大人という一般市民を発掘し、いかにふやしていけるかが問題解決の重要な鍵であり、問題が「関係性の貧困」である以上、経済支援、物理的支援だけでは解消されない、生きづらさに寄り添えるかわりの力が不可欠だというふうに私たちは捉えました。

このような人の力を掘り起こすには、一般市民にとっても入り口が広くて「共の世界」にかかわりやすい環境もやはり必要になるということで、最初の話に戻っていくと、「共の世界」をつくっていくということに戻っていきます。

以上、我々社会教育委員の会議からの基調報告を終わりにしたいと思います。

○司会 萩原議長、基調報告をありがとうございました。

ここで第1部を終了いたしまして、第2部に入りたいと存じます。第2部は、具体的な事例といたしましてリレートークを行います。それぞれの活動を通して関係が豊かになるということはどういうことなのか。また、スタッフがかかわっていく中でどんなところに注意を置き、どのような課題があるかなどをお話しいたします。

それでは、本日はお2方にお越しいただいております。

初めに、区内で地域共生のいえをされております、岡さんのいえTOMOの代表の小池良実様からお願いいたします。小池様、よろしくお願いいたします。

○小池氏 皆さん、こんにちは、小池でございます。私、古い大人なのかもしれませんが、極めて個人的な場所で個人的なことをやってきたのですが、それが何かに届いているのであればとてもうれしいなと思って、お話させていただこうと思いました。

お手元にカラーの新聞があると思います。これはぜひ持ち帰っていただいて見ていただきたいのですが、この表紙は、75歳のおじいちゃんが書いてくれています。企業を退職し

た方々が、11年ほど前に、トラストまちづくり大学というところでフィールドワークとして使っていて、そういう方々が力を合わせてつくってくださった新聞です。

この岡さんのいえですけれども、岡ちとせさんという私の大おばさんです。遠いですね、大おばさんなので、私のおばあちゃんの妹に当たります。そういう方がこの家で英語を教え、ピアノを教えたりしていました。何か聞くと、占領下の国会議事堂で英文のタイピストをしていたそうなので、キャリアウーマンのはしりですね。独身を通してしまったので、最後の5年ほど、私、介護の窓口になりました。

これは、岡さんのいえから出てきた昭和25年の写真です。どうもよく見ると手に何か持っていて、ちょっとおめかししています。英語教室の中でもクリスマスときは外国からのクリスマスカードがいっぱい来て、それが楽しみだったと言っていたので、そのときの写真じゃないかと思います。今みたいにスマホもないですし、写真はとても特別なもので、特別な時に撮ったものだと思います。

そして、この真ん中にちょっと人相の悪い、イガグリ坊主が見えますでしょうか。この人が60年後に岡さんのいえで知り合って、今、囲碁の先生をやってくださっています。そういう出会いもあるものだなというものです。

これは遺言ですが、この家は私の子どもみたいなものだから、地域の方たちに役立ててほしいと言われたのが12年ほど前です。99歳で亡くなりました。どうしたものか、今みたいに子ども食堂とかサロンとかそんなになかった時代なので、本当に手探りでこぎ出した感じです。でも、とにかく、この方のおかげで私は生きていられた。家庭の中で孤立もあったものですから、この人がいつも紅茶とケーキで迎えてくれることで、私は難しい思春期を乗り切ったなという気がしています。なので、ずっと恩返しの時間ですよ。

こんな感じで、皆さんでいろんなことを手探りでやってきました。今では大体累計で年間2000人ぐらいいらっしゃる。小さな30坪余りのおうちですけれども、さまざまな方が出入りして、さまざまなことをいろんな時間にできるようになっています。東松島の、被災地支援って書いてありますが、東松島の東名というところとも結びつきました。ここは3月11日、停電していて全く放送が流れなかったので、大変行方不明者が多い地域です。津波から逃げた人がおっしゃっていましたが、とにかく顔を見たことがある、名前を知っている、挨拶をしたことがある、もうこれだけで生存率が上がると言っていました。

多世代の交流や、地元小学校への出張などいろんなことをしてきました。定期的な居場所をつくりましょうということで、毎週水曜日、デーカフェということであけています。

これは駄菓子屋を縁側のところでやっていますが、これをシニアの方がスタッフとしてやってくださっています。

知識や趣味を教えるということでサンデークラブ、これは皆さんが発意して、これをやりたいということで、こんなふうに鉄ちゃんクラブがあったり、毎週日曜日、囲碁を教える人がいたり、この囲碁の先生が先ほどの65年後ですが、後ろ姿なのが残念ですね。手芸を教えていただいたりしています。

さらに定期的な居場所をつくるということで、4年目になったのですが、区の若者支援課の受託事業として「たからばこ」、中高生の居場所というのを毎週水曜日の6時から8時の時間やっております。これはオセロをやっていますが、2人とも激弱で、よく見ると4隅があいています。あいた状態でうんうんと苦しんでいます。左側の子はフィリピンの子ですが、いろいろな不自由を抱えてはいるようです。言葉の壁って大きいですね。

これももう1つ、これは岡'sキッチンといいまして、第4土曜日、これまた受託事業として、児童養護施設を退所した子の食事会というのをやっています。ここには、いわゆる虐待から措置された子どもたちが18歳まで過ごす場所、そこをまた卒業した子たちが集まるような場所となっています。毎月、何が食べたいということで、翌月のリクエストを聞いて、みんなでつくるようなことをしています。先月は餅祭りで餅をついて、みんなで食べて、大変いい時間でした。ただ、大変気まぐれだったり、何か忙しかったりすると、ぱっと忘れちゃったりいろんなことがあるので、満員御礼とかそういうことはないので、大学生のボランティアの子たちが手伝ってくれています。

これは岡さんのいえで起きたことです。あるおばあちゃんが、デーカフェは毎週水曜あいていますが、もう玄関先から泣きながら入ってきまして、動揺しつつも、スタッフが話を聞き、私は普通じゃないなと思ったので、あんしんすこやかセンターのほうに連絡をして、あんしんすこやかセンターもある程度把握していたのですが、そこから御家族につながって、介護度の認定調査に回ったという件があります。

このおばあちゃんは大変立派なお屋敷にお住まいでした。私1回お送りしたのですが、大体家が100坪ぐらいあり、大変大きなお家で、息子さんたち家族と二世帯同居ですが、入り口も別、それから車庫も別、お庭も別、ただ建物が1つというだけで、お風呂もトイレも全部別。そういう中で、人の気配はするけれども、日中全く1人、もうこれはかなり寂しい状況です。そういう中で認知症が進み、すごく細かな縫い物ができたそうですが、もうできなくなっちゃったのと言いながら見せてくださっている図ですね。家族もやっとそ

れで気づいて、今動き出しているような状況です。

中学生ですね。中高生の居場所をやっていて、映画会をやっていたら、玄関があいて、充電できますかと言われて、できますよ。できますけれども、映画を見ているから、映画を一緒に見てくださいねというのがきっかけで入ってきて、そのときはもうスマホしか見ていませんよね。そこから毎週来るようになり、非常に攻撃的。手伝ってくださっている女子大生がいっぱいいますが、そういう子たちに物すごく否定的なことを言う。何だ、その服は、みっともねえなあ、格好悪いな、ニンジン1つ切れねえのか、ばかじゃねえのとか、それはすごかったですけれども、女子大生も振り返りのときに、私、どうしてこんなことを言われなきゃいけないのですかなんて言うのですが、小学生が気になる女の子にちょっと暴言を吐いているのと一緒にいるだけと言って、1カ月、2カ月、半年近く耐えたら非常に警戒を解いて、驚くほど協力的になりましたね。この中学生の同じクラスのお母さんがこの間ふらりと来たのですが、何があったのですかと言われてました。何がといったって、別に御飯と一緒に食べているだけと言ったのですが、何かすごくおとなしくなって、今や癒しだと言われてびっくりしました。

でも、こうやってかかわっているうちに、背景にはお母さんの精神疾患があって、母子家庭であることとか、勉強についていけないこととか、本当にぼつりぼつりと問わず語りで、この場で話すことは余りないですね。話し出すのは帰りに送っていったりしているときなので、これはこつだと思います。この子です。こんな笑顔を見せるようになりました。後ろでフィリピンの子も笑っていますけれども、温かいものを一緒に食べるってすごく大きなことだなと思いました。

今度は、これは施設退所の20代男性ですけれども、まだ大分突っ張っているという感じですかね。いろんなことを話しますが、余り打ち解けようとしなない感じの子だった。その子が介護事業を立ち上げるといって頑張っている様子で、岡'sキッチンだけじゃなくて、ふらりと「たからばこ」、中高生の居場所にあられて、物すごくたくさんコーラだの、カルピスだの、ポテチだのを持ってきていて、どうぞとも言わず、ぼんとテーブルの上に置く。多分、これだけ俺は大丈夫というのを見てもらいたかったのかなという感じもします。兄貴風ですかね、それを中高生は喜びますから、ありがとうなんて言われると、いや、別にみたいな感じで、非常にツンデレな感じがまたおもしろく、さっき出てきたフィリピン人の子と、あの子はとても腕力があるので、腕相撲しようぜと毎回来て言います。腕相撲をすると、時に負けそうだったりして、やばい、負けそうだったとか言って帰っていく。

この時間、この子にとっては何だろうなと思いますが、来なくなるのではなく、別の時間に来ている、そのことがいいことなのかなんて思って眺めています。こんなふうにいつも交わってわいわいやっています。

これは小3の女の子ですが、この子は保育園のころにはお母さんにベビーカーに乗せられて来ていました。駄菓子を買って帰ったりしていたのですが、お母さんは働いていて、小3になって久々に遊びにきて、今、学童が100人を超えているそうで、もうとにかく息苦しいと。水曜日、岡さんのいえがやっているのなら、水曜日だけはここに学校終わったら来ちゃだめかと言われたので、それはお母さんとまず交渉して、と言って、お母さんに言ったら、では、気をつけて帰ってくるのだったらいいし、岡さんのいえに大人の人がいるのだったら、受け入れてくれるのならいいわよということで交渉成立して、ただいまと帰ってくるようになりました。お母さんが来るのは大体7時過ぎなので、そこまでは小3もまじっている中高生の居場所にここ数カ月はなっています。

そうすると、もう非常にお互いにいい効果がありまして、食事会もやっているのですが、そのときに、買い物に行くと何でもかんでも入れる男子がいます。ふと振り向くと、かごの中に要らないものが入っていたりしますが、この小3の女の子がこんな高い方ものは入れちゃだめみたいな感じでしっかりと見張ってくれています。そうすると、はい、すみませんとか言って、結構男子も言うことを聞く、意外といいなと思って私は眺めています。それと、えげつない下ネタが激減しましたね。これがいいことなのか悪いことなのかわかりませんが、私は過ごしやすくなりました。

こんなふうにジェンガをやって、みんなでわっとなったりしています。これはカメラマンの方が撮ってくれたので、いい瞬間を撮ってくれたなという感じですよ。これは弟君が保育園から帰ってきたところですね。

こんなふうに、誰がどうとかそういうのではなくて、手伝ってくださっている大学生に言われたのですが、遠い親戚が集まっているみたいな場所ですねと言われました。そういうふうになんとか決めずとも、こういうふうになんとか集まって何となく化学変化が起きる場所というのはすごく温かくて、私にとってとてもいい時間をいただいたなと思っております。それがいろんなことにこれからまた役に立ったり、この子たちが恩返ししてくれたりしたら、それはうれしいですけども、そんなことを期待してやっているわけではなく、この温かい時間を大事にしていきたいなと思っております。

御清聴ありがとうございました。

○司会 小池様、ありがとうございました。

それでは続きまして、当会議の委員でもあります、せたがやこども食堂・みっとの代表をしております、村上由美よりお話しいただきます。村上様、よろしくお願いします。

○村上委員 社会教育委員でもあり、せたがやこども食堂・みっとの代表でもある村上です。本日は、よろしくお願いします。

子ども食堂と、今とてもよく話題にもなることがふえてきているのですけれども、子ども食堂をしていらっしゃる方はどのぐらいいらっしゃいますか。お手を挙げていただけるとうれしいです。——ありがとうございます。

ざっと一般的に言われる子ども食堂の御説明をまずさせていただきたいと思います。

ネーミングの子ども食堂という名前は、2012年、大田区の気まぐれ八百屋だんだんの近藤さんがつけました。その前にもこういった活動はありましたが、子ども食堂という概念が生まれたのはこのときからとされています。あえて定義というならば、子どもが1人で安心して来られる、低価格もしくは無料の食堂のことを言います。子どもがひとりぼっちで食事をしなければならぬ孤食を防ぎ、さまざまな人たちの多様な価値観に触れながら団らんを提供すること、こういったことを子ども食堂と言っています。

運営形態等々は、これは農林水産省の子供食堂向けアンケート調査結果という2019年の10月から11月に実施したのですが、運営している運営形態としては任意団体、「みっと」もこの任意団体です。あとNPO、個人、一般社団法人が主になっています。

この団体がそれ以外の活動はどんなことをしているかといったときに、子育て支援、学習支援、児童福祉、高齢者福祉など、あと子ども食堂のみの活動という方も多数いらっしゃいました。開催頻度としては月に1回から2週間に1回程度で、大体全体の7割で、時間帯としては平日の夜、土日の昼間というふうになってきています。1回当たりの参加人数は、大人も子どもも10から20の間ぐらいのところが一番多くなっているのでしょうか、こういったのが現状です。

また、2018年の4月の時点で全国に子ども食堂は2286カ所、一番多いのが東京都で335カ所、少ないところで徳島県、長崎県の7カ所、世田谷区は世田谷区の社協さんの登録しているところで現在33カ所になっています。これも数え方がいろいろあるので、目安でしかありませんし、実際に子ども食堂のような活動をしているところは3500から4000あるのではないかというふうに、ついこの間あった、こども食堂サミットでは報告がありました。

2012年から始まったこの活動、2016年から2018年に急激に増えています。これがどうし

てかということで、社会活動家で、現在大学の先生をされている湯浅誠さんによりますと、当初は貧困の子どもが行くところという印象がありましたが、多様な運営者によって、多様な運営方法、利用者を限定しない、そういったことで地域交流や子どもを見守る場としての環境が生まれやすくなっているということで、自治体が活動を支援する動きができています。補助金や助成金を出してくれるようになってきた。そして中間支援する団体がふえてきた。子ども食堂をやりたいという人がいたら、子ども食堂につながる支援を行う、あとは子ども食堂の活動をメディアですとかマスコミ、SNSで発信するような、取り組みがなされてくることで増えてきたと言われています。

子ども食堂の中でも、こども食堂ネットワークという大きなネットワークがあって、こども食堂サミット2019で5回目になります。こういったところでも、初めは立ち上げる、子ども食堂を広げるにはということだったのですけれども、今ではどう支えていくかというようなことがメインのテーマになってきています。

ここまでは一般的な子ども食堂の話でしたが、ここからはせたがやこども食堂・みっとのお話になります。

みんなで一緒に楽しく食べよう、m i t tで「みっと」です。「みっと」は、2015年の4月に世田谷区生活に困窮する子どもを支援する事業実施要綱ができたときに、今、「みっと」の活動の場は世田谷線の松原の駅前のシーマシーマというレンタルスペースですが、そのオーナーが、この要綱が子どもにおりてくるまでにはどれほど時間がかかるか。では、私たちに何ができるのかといったときに、豊島区にあるWAKUWAKUネットワークがやっている子ども食堂を見学に行く機会があって、これならできるかもしれないといって、周りの人に声をかけて集まった6人で子ども食堂の準備会議を始めました。これが2015年の8月です。社協さん等々の会議に出席しながら、地道に運営資金、回転資金をためて、2015年の11月に第1回せたがやこども食堂・みっとを開店するに至りました。

それ以降は毎月第2・第4木曜日の夕方に2回開催していて、4年目、100回を数えるまでになりました。チラシをつくって、地域の子どもや、初めは学校に配って活動を広めていきました。現在は午後4時半から午後7時半、小学生は7時まで、終わった後はお迎えのない子は送っていています。場所が10人も入るといっぱいになってしまうので、子どもだけで来てもらう食堂ということと歩いて来てもらうということを決まりにしてやっています。

そう言いながらも、どうしても必要な御家庭もあるので、そういった人に限っては参加

してもらっているのですが、現在、平均では子どもが10から15の間ぐらい、母親の参加が2名となっています。

そして、私たちだけではなかなか手に負えないような子たちがいるので、そういった子どもの対応のスキルを持っているお兄さんにファシリテーターとして入っていただきますし、世田谷社協さんのせたぜミを利用して、食育、子どもの相手をしてもらうということで、大学生ボランティアに入ってもらっています。また、地域の方々の支援もとてもありがたく、たくさんあるのですけれども、その中でも、私たちメンバーの中では、子ども育てはしたことはあるけれども、実際に子どもの専門家というようなメンバーがいなかったものですから、どうしたものかと友人に相談したところ、この地区でこの人なくては語れないというような主任児童委員さんを御紹介いただきました。その主任児童委員さんを通じて、子どもさんを紹介していただいたり、また困ったことがあったときには主任児童委員さんに御相談して、学校や行政、私たちが入り込めないところにつないでいただいたり、また、主任児童委員さん自身が動いていただいたりとしながら、この活動には欠かせない存在となっています。今日も来ていただいています。この場をかりてお礼を申し上げ、感謝したいと思います。そういったたくさんの人々に支えられながらこの活動は行われています。

「みっと」の貧困についての考え方ですけれども、子どもを取り巻く環境が劣化しているのではないかと。その中で子どもの成長に必要なものが不足している状態、これをみっとのメンバーの中では子どもの貧困と考えて活動しています。

先ほど、岡さんのいえでは昭和25年だったのですが、ここは昭和28年、戦後、戦争が終わって8年目の世田谷区の赤堤の様子です。一番左にいる小さいのがその方です。このように全く何もないようなところに集まって、そして今だと貧困と言われてしまうような、こういったいでたちの子どもたちでしたが、さまざまな年齢の子どもが集まって楽しかった。誰かのうちで御飯を食べたり、お風呂に入ったり、お下がりのお洋服をもらったり上げたり、そんなことが当たり前。お金や物はなかったかもしれないけれども、豊かなかわりがあり、とても楽しい時間だったということを話してくれています。先ほど、萩原先生のお話にもあったように、経済的なことばかりではなく、そういったものがなくても豊かな気持ちでいられるといったようなことを話してくれていました。

実際にここから、「みっと」は食事の提供、地域での居場所づくり、多世代交流、学習支援を4つの柱として運営しています。

これはオープン当初の様子です。子どもたちの間に学生さんが入ったり、時折、親子さんがいたりして食事をしています。もう大騒ぎ、大騒ぎ、大変なことです。このときは一緒にギョーザをつくって食べようという会でした。

これは、毎月第4木曜日はその月生まれの誕生会をしています。リクエストをもらってつくりますが、焼きそばとオムレツとかぶったので、オム焼きそばをつくって、そこにお誕生日の子にはケチャップでメッセージを書いて出したりしています。

支援でいただいたたくさんの種類のミカンでミカンコンクールをして、ミカンも甘い、酸っぱい、苦いがあるね、そんなふうにしながら食育をしたりしています。

子どもは魚が余り好きではない。お魚とお肉を交互にメニューとして出していますが、お魚を好きになってもらうにはと思って、お魚クイズをした時の話です。お魚の骨が嫌いだった子が、お魚の骨って必要だということに気づいて、骨について、とやかく言わなくなったというようなこともあります。

これは5月なのでこいのぼりを折り紙で折って、持って帰ってもらおうと思ってスタッフが用意した時のことですが、折ってつくったものを子どもが持って帰らない。どうして持って帰らないのと聞いたら、おうちで誰も見てくれない、もしくはこんなものと言って捨てられちゃう。だから、持っていってもしようがないという。では、どうすると言ったら、ここに張ってもらいたいというような声が出て、急遽、大きな模造紙に滝を描いて、好きに張っていいよと言ったら、子どもたちがわあっと張ってくれた、それが真ん中の元気なコイが滝登りをしている滝登りになりました。この張ったものを子どもたちは、これが私の、あれが僕のと言いながら、とても自慢そうにうれしそうにしている姿を見て、こちらが用意したことではなく、ここに来ている子どもたちには何がしたいと聞いてから用意することが大事だね、子どもをもう少し主体にした活動にしようというような話し合いが生まれた事例です。

同じようにクリスマス会、「みっと」を知ってもらいたくて、学校や地域へチラシやポスターを張って、狙いどおりたくさん子どもたちが来てくれましたが、こういったイベントになれている子どもたちが来てしまいまして、いつも「みっと」に来てくれる子どもたちは本当に隅っこの方に小さくなって、いつもの元気な姿とは全く違う。後で、ああいふクリスマス会がまたあるのかというようなことを聞かれたときに、私たちは誰のためのクリスマス会なのかということを話し合って、地域イベントではなくて、来ている子たちのクリスマス会をしようというような話し合いのもと、翌年からはそういったクリスマス

会を催すようにしました。

毎年1月の最初はお節を出しています。お節と言うにはお恥ずかしいものかもしれませんが、こういったものでも、伊達巻きを知らないとか、昆布巻きって何というような感じでしたが、4回も数えますと、新しく来た子に、これがね、あれがねと言って説明している姿が見られるようになってきました。

食べたものを外にある黒板に女の子が書いてくれて、それを通りすがりの人が見て、こんなことをやっているのと言ってくれ、書いた子もすごくうれしそうですし、通りの人も興味深くなるといったようなことで、子どもが思いもよらないこと、そして、それが地域の人たちにいろんな形で響いていくというようなことが、この小さな子ども食堂で日々繰り返されています。

これは留学してしまうボランティアさんのお別れ会を子どもが企画したときの話です。狭いので、近くの集会所を借りて学習支援をしているのですが、ハンカチ落としを企画して、真ん中で鬼は踊らなければいけないという過酷なハンカチ落とし。そしてその後、みんなで輪になって踊って、最後は感謝状ということでした。もらった学生さんもうれしそうだったのですが、何よりもやった、主体となった子どもたちはすごく満足そうでした。

このことから、普段学校でこういうお別れ会を開いているのではないかな。そういったときに、リーダーにはなれないけれども、「みっと」ならできそうだなといって活動したのではないかな。そういったことが実現できる場であることも、こういった小さな活動の中では大事じゃないかというようなことを話しています。

毎回、「みっと」では閉店後、ボランティアさん、スタッフで話し合いをしています。スタッフ、ボランティアもそれぞれの価値感が違うので、全く話し合いで解決することではなく、どこか1つに落ちることもありません。そういったものを持ちながら、家庭や地域、学校、行政、専門機関、それぞれに出向いていったり情報をもらったりしながら情報交換しています。それを持って、またなぜそのようなことをするかというと、やはり子どもの理解、どうしてその子がそんなようなことをするのかということの理解なしには、やみくもに怒ったり、もう嫌だな、早くこの子は来なければいいのになんて思ってしまうことも多々あったのですが、このことを繰り返していくうちに、少しずつ私たち支援者の中にも頭ではなく体で感じられるようになってきています。私たちは何せ子どもの専門家ではないので、本当に拙く始めた初回から、この4年間、子どもとともに成長させてもらっているというのが、こういった繰り返しの中で少しずつ成長していることかと思っています。

どうしたらいいのか、何かしたらいいのかしないほうがいいのか、どうやって見守ったらいいのか、毎回活動を工夫してやっています。

せたがやこども食堂、この「みっと」の活動から、一言言わせていただきますと、見えてきたものとして、子どもの問題は大人の問題であると感じています。この子どもたちが大人になったときにどんな大人になるのか。明るい未来をみんなで描いていくことが大切だと考えています。子ども食堂を通して、子どものために何ができるか、何かしたいという方がたくさんいることがわかりました。子ども食堂のような場が地域のあちらこちらにあって、つながりも豊かになるのではないかと考えています。地域の人たちがつながり支え合う場や仕組み、先ほど萩原先生のほうからおっしゃっていただいた「インフォーマルな共の世界」のつながりを豊かにする、この後行われますワークショップの中で、皆様といろいろ話し合いをしていけたらと思っております。本日は、御清聴ありがとうございます。

○司会 村上さん、ありがとうございました。ここまでで一応2部を終了いたします。

それでは、この後の流れに関して御説明申し上げます。第3部のワークショップに入る前に、これからワークショップについて説明をさせていただきます。話し合ってくださいサブテーマが3つありますので、説明後は休憩に入りますが、その際に話し合いたいテーブルに御移動いただきますようお願いいたします。

それでは、当会議の坂倉副議長より説明をいたします。よろしくお願いいたします。

○副議長 皆さん、こんにちは。社会教育委員の1人をさせていただきます、坂倉杏介と申します。この後半のワークショップの案内をちょっとだけ休憩前にさせていただきますと思います。

皆さん、子どもの貧困とは何かという非常に抽象的、理論的なお話から、実際こういうことかという、その子どもの生きづらさにかかわる人たちの現場の様子まで見たり聞いたりされて、お腹がいっぱいになってきているかもしれません。前半は見たり聞いたりするという時間ですが、後半は皆さんが話したり書いたりする時間になっています。

テーマの説明の前に、何でそんなことを皆さんとやりたいかと思っているかということについて一言説明させていただきますと、社会教育委員というのは2年間の中で何らかの提言をつくらなければいけない。私は2期目ですが、子どもの貧困というテーマで話し合ってきたのが前の期からですが、複雑な課題で、この2年半ぐらいで、萩原先生が御紹介いただいたように、それは経済的な問題として考えないほうがいいのではないかというこ

とが見えてきました。

ただ、では、「関係性の貧困」という問題をどのようにすればもっとよくなっていくのか、そういう関係性が乏しい子どもの生きづらさに私たちはどういうふうにかかわれるのかという具体的な方策については、まだまだ全く見えていないに近い状況です。

今日は、いろいろな関心や、経験や、知見をお持ちの皆さんにお集まりいただいていますので、この子どもの生きづらさに私たちがどうやってかかわっていくのかという具体的な案をたくさん出してみたいと思っています。それがあと1年半ぐらい後に、私たちが提言としてまとめていく内容につながっていきます。ぜひ皆さんの経験や頭をかしてくださいというのが後半の意図になっています。非常に難しい問題ですから、では、自由に意見を出しましょうといってもなかなか出ない可能性がありましたので、今日は3つの手がかかりとなるようなテーマを設けて、そこから発想を膨らませていこうと思っています。

この3つのテーマというのが、先ほど萩原先生からお話しがあった3つの方策と対応しています。インフォーマルな「共の世界」をつくっていくということ、そのための社会的なネットワーク、プラットフォームをつくっていくということ、それから第三の大人をふやしていく、これですね。1つ目が、困っている子どもって見つけにくいわけですね。どこにいるかわからないし、そういう子たちがどういうふうに必要な人につながるのか、そのきっかけづくりが非常に難しい。要は、困っている子どもたちのSOSを私たちの社会でうまくキャッチできるように、よりその確率が上がるようにするためにはどんなことが必要なのか、どんなことができるのか、あるいは私たちの社会はどういうふうになっていったらいいのか、こんなことを考えてみたいというのが1つ目のテーブルです。

2つ目がインフォーマルな「共の世界」をつくっていく社会的なプラットフォームをつくろうということで、要は当事者同士とか、当事者がサービスにつながるだけではなく、私たち大人同士がどういうふうにつながり合えるのか、連携できるのかということです。これは個人個人のつながりもありますし、専門機関と専門機関がどういうふうに手を組むのか、あるいは、例えば高齢者の見守りなんかだと、インフラの事業者、ガスとか水道とかの事業者がいろんな情報をキャッチして、それをつなげていくということが起こり始めています。子ども系だと子ども食堂をファミマがやろうとかいう話が最近出てきていますね。民間の事業者や公的なサービスがどういうふうに連携するのか、個人個人がどういうふうに協力するのか。子どもの貧困に、困難に関心を寄せる者同士がつながり合うためにはどういうふうにしていったらいいのか、これが2つ目のテーマになります。

それから3つ目、これは私たち自身の問題ですね。先ほど、小池さん、村上さん、第三の大人の模範例みたいな、名誉第三の大人として殿堂入りしていただきたいぐらいの事例だったと思いますけれども、私たち自身が困難を抱える子どもやその家庭につながっていくにはどんなことができるか、どんなことが必要なのか、私たち1人1人に何ができるのか、こんな切り口から考えていこうというのが3つ目のテーマになっています。

皆さん、休憩中にどのテーマを考えてみたいか考えていただいて、1番目のテーマについて話してみたいよという方は1、2、3番のテーブル、2番目のテーマの方が4、5、6のテーブル、最後3番目のテーマの方が7、8のテーブルというふうに移ってみたいと思います。定員ぴったりになるかはやってみないとわからないので、動いてみてください。

○司会 ありがとうございます。

それでは、これから10分間の休憩に入ります。今説明がありましたように、この時間に話し合いたいテーマに御移動願いたいと思います。

〔休憩・ワークショップ〕

○副議長 それでは、発表に移ろうと思います。1時間にも満たない時間でした。駆け足でアイデアを出して、話し合っただけで大変だったかと思います。

この後、発表をいただきますけれども、短時間でやってきたものですから、完全なアイデア、提案でなくて構いません。ただ、1人では絶対思いつかない。みんなであれこれ話しながら考えていくからこそ、いけるかもしれないというその予兆ですよ、その予感をつかんでいくことが大事だと思いますし、何より皆さんがこうして真剣に楽しくテーマについて話し合えたということ自体がすごく貴重なことだと思います。

時間の許す限り、皆さんのアイデアを聞きたいのですが、我こそはと思うチームから順に、時間が切れるまでという方式になってしまいます。今度の社会教育委員の報告書にこのアイデアもぜひ入れたほうがいいと思うよという方、早速手が挙がりました。テーマ2ですね。では、約2分間発表いただきたいと思います。その場で結構ですので、模造紙で書いてあるものを見せていただくといいかもしれません。

インフォーマルな「共の世界」のプラットフォームづくり、大人と大人がつながるにはどうしたらいいのか御発表をお願いいたします。

○4班 私たちは、主に私がボランティアな活動とか社会的な活動に、会社員としてはど

う参加したらいいのかという課題をすごく感じていたので、その困り事を言っていたら、皆さんにまとめていただくことができました。

まず話の流れとしては、いろんな人がまず集まる連絡カフェみたいなものがあればいいんじゃないかと。カフェというのも、食事だとハードルが高くて、コーヒーとか紅茶とか温かいおいしい飲み物があるくらいだったら私でも参加できるなと思って、その流れでまちセンカフェ、学校カフェとか、既にある施設を使ってカフェをオープンするというのは意外と実現性が大きいのではないかというようなお話になりました。

と同時に、私のような情報難民に対しては、世代的にはインスタグラムなどの発信できるようなサイトがあればいいんじゃないかというお話の中で、それぞれ団体の方、皆さん、自分の現場にすごく一生懸命で、お隣の団体が何をやっているか、そういう情報が手に入りづらいというお話があったので、いろんなところに転々で行ける人がいたらいいのではないかと。

そういう人たちがインスタグラムか発信する場所で、写真と活動名と場所と、こういうことをやってますよと紹介するサイトみたいなものがあると、ここは家から近いから行けそう、土曜日だったら参加できそうと思えて、団体の方々も情報を知ることができる。人と人をつなぐ方法をいろいろと挙げました。

○副議長 ありがとうございます。2分びったりです。では、テーマ1、お願いします。

○3班 子どもたちのSOSをキャッチするために、子どもたちがふっとつぶやけるような隙や遊びや食みたいなのがあったらいいということで、昔の駄菓子屋ってこんな機能があったというような話があって、子どもたちが身近に行ける場所に駄菓子屋的なものがあったらすごくいい。そこに多様な大人がいて、そういう中で食事や話をする...というような話が1つまとまりました。そこでも、例えば横浜とか大阪でやっている図書館の中のカフェみたいところで、学校の中に入っていくというのでもいいアイデアなんじゃないかという話が出ました。

それから、今現状できていないというところと言うと、保護者へのアプローチは、時間もかかるし難しいというところと、もう1つは、学校とつながれて情報が共有できるようになると効果は大きいだろうけれども、今、個人情報の問題があって、その辺はうまくいっていないのではないかというような話でした。

○副議長 ありがとうございます。駄菓子屋さんはいいですよね。駄菓子屋さんの2階がエアビーになっていて、下は駄菓子屋みたいな、そんなのができたらおもしろいなんて思

いました。ありがとうございました。

では、3つ目のテーマの方から、よろしいですか、お願いいたします。

○8班 我々8班のチームは、困難な子ども、家庭とどうやってつながっていくのかというところでした。

大きなものとしては、朝の立ち番をしている方が気づく子どもたちの変化や、コンビニの前にたむろしている子どもたちとか、そういった子どもたちを見て、この子たち大丈夫かなというつながり方。

もう1つは、集会場を借りて、子ども食堂もそうですけれども、子ども学習とか集まれる場所をつくって、学校などに告知物を配って子どもに届ける。

あと、イベントとかそういったものになりますが、ただ、そこで1つ困難な問題としては、やはり困難を抱えている子ども、家庭がそこへ行くかというふうになると、なかなか自分からそこへ入っていけないこともあるということで、その解決策として、1つは、子どもは学校にいるスクールカウンセラーさんに相談をする、あとは学校の先生に、実はお父さん、お母さん、いつも帰りが遅くて1人で御飯を食べていると相談をする。そうしたときに、先生から、だったらこういうところがあるから行きなさいみたいな形で、学校に情報提供して、学校からもこういう子ども食堂があるから行ったほうがいいよと紹介してもらい横のつながり、そして、我々主催者側も、声をかけていくというような形で、継続していくことが大切だと話し合いました。

○副議長 ありがとうございます。いろんなイベントや場がしっかり地元の学校とつながってやるということで、相当効果が広がっていきそうでしたね。では、ここから発表したいという人からどんどん行きたいと思います。では、テーマ1、1班お願いいたします。

○1班 私たちが日頃子どもたちのSOSをキャッチするには何が必要かということで話し合いました。

結局、最終的に何をやるかという結論が出る手前でしたが、いろんな子どもがいて一緒に遊べるといいね、地域でそういう企画があるといいなというところまで話をしました。そこに子どもが出てきてもらわなきゃいけない。子どもに出会うことで、SOSをキャッチする、一緒に話したり一緒に遊んだりできる、それを地域で、子どもにとって魅力的な活動を企画しようというところまで話がいきました。

そして、ぜひ小学校、中学校で直接子どもに届けられるお知らせを配付していただきたいと思います。それが参加費無料で、子どもが行けるなと思ったら、行ける距離にあって

魅力的だというのがいいなと思いました。

○副議長 ありがとうございます。残っている方で我こそはというチームがあればぜひお願いしたいのですが、いかがですか。

○6班 6班では、若者たちにはネットやSNSを使えば、いろんな団体の情報を得たりできるけれども、逆にそういうところが苦手なシニア層等にはどうやって情報を届けようという話をちょっとしていました。図書館が割と人が集まっているということだったり、あとは地域とつながっている青少年委員だったり、地区委員会の方々からも情報を発信してもらって如果能たら、シニア層にも情報が集まるのかな。でも、シニア世代とネットで情報を得た人たちのつながりをどう持っていったらつながれるかなというところは、まだそこまで話し切れていないですが、そういう課題もあるという話が出ました。

○副議長 ありがとうございます。確かにシニア層の方にこそ、我が事として、自分事として、この問題に関心を持って参加していただくということが何らかの形で実現できれば、こんなに力強いことはありませんね。

時間になりましたので、このワークショップはこれでおしまいにします。皆さんからいただいた本当に貴重なアイデア、ありがとうございました。これを再度拝見させていただいて、次の提案でしっかりつなげていきたいと思います。

○司会 ありがとうございます。

短い時間にもかかわらず、どのテーブルも実現可能なアイデアにあふれ、今後、社会教育委員の会議ではこのアイデアをもとに、教育行政の施策に向け、議論の参考にさせていただきます。本日まとめていただきました模造紙は、第28期社会教育委員の会議の報告書にまとめ、掲載させていただく予定でございます。

最後にお手元のアンケートに御記入いただきまして、お帰りになってください。

そして御案内です。この後はお時間のある方は、交流とネットワークづくりと題しまして、御参加いただきました皆様同士のつながりを豊かにするためのお時間を設けております。30分ぐらいですが、どうぞそちらにも御参加いただきますようお願いいたします。準備ができるまで、アンケート等をお書きいただきながらお待ちください。

それでは、これを持ちまして社会教育委員の会議「みんなで語ろう！子どもの貧困と関係の豊かさ」を閉会いたします。